

私たちの大学改革とカリキュラム

試行的経験を総括して

丹羽 孝

名古屋市立大学・人文社会学部

□ はじめに



本小論は、平成八年の四月一日をもって、いわばめでたく発足の運びとなった名古屋市立大学人文社会学部の形成過程について概観し、併せて平成三年六月に改正された「大学設置基準の改正」（いわゆる「大学設置基準大綱化」）の考え方のもとでの大学改革のひとつの実践的経験の総括を試みようとしたものである。

なぜならば、ここに報告する本学の事例は以下の三つの意味において、今日的な大学改革の課題をまさに象徴的に

含んでいたと考えられるからである。

第一には、地域に根ざして四十年有余の間、地道に教育・研究に貢献してきた二つの公立短大（名古屋市立女子短期大学、名古屋市立保育短期大学）が、その短期大学としての歴史的役割に終止符をうち、新たに四年制大学の新学部としての再生を図らなければならないという社会的状況の存在であった。

第二には、既存の名古屋市立大学教養部の改編問題と両短大の改組問題がドッキングし、結果として名古屋市立大学の教養部改組についてのひとつの回答が提出されたとい

う点である。

第三は、新学部における資格取得問題がひとつの論点として存在していた、という事である。この問題はとりわけ保母資格と幼稚園教員免許状の取得問題に関して極めて厳しい現実が存在していることを明らかにしてくれている。

以下、本事例が他大学の教育改革に際して少しでもお役に立てばとの願いを込めて、そして本改革の基本理念の再確認をとの思いを込めて、その内容の概要を簡単に報告させていただこうと思う。但し、本稿の記述は資料の制限等によって、あくまで保育短大のサイドからの視点で描かれることについて、予めご了承ください。

□ 新学部設立への歩みから

どのくらいの

まず最初にこのプロジェクトへの取り組みに関して、どのようなタイムスケジュールが描かれたのかについて述べる。それはこうしたプロジェクトに取り組む際

かかったのか

にわ、たかし●一九四六年生まれ●専攻は教育学●論文、著書に「現代韓国幼児教育研究」(一九九五年 名古屋市立保育短期大学紀要、vol.32)、「戦後の子どもの生活と遊びの変容」(一九九五 『子どもの文化 vol.27-17』)、「保育内容総論」(小田豊編 共著三晃書房 一九九三)●必要な情報等がありましたらご連絡下さい。

の大きな流れ(計画の全体構造)を把握しておくことが何よりも重要なファクターのひとつだと実感したからである。

以下に示したタイムスケジュールは大きく二つのパートに分けて考える事が適当である。いうまでもなく、そのひとつは具体的な計画の出力を準備した、いわば地ならしと関係者各位の合意を形成するために要したタイムテーブルであり、今一つは実際に新学部の設立が行政の方針として採用されてからの、いわば実務的タイムテーブルである。

表1は前者に関するタイムテーブルの一覧である。以下、この表の内容について、若干の説明を加えることとする。

第一は、保育短期大学が一九七七年当時において、日本の高等教育の将来展望を見通した上で、もはや四年制大学への移行は社会的必然であるとの認識に立って、四年制大学づくりをめざしてから、具体的にその作業が実務レベルに下された、一九九一年四月、総務局内の組織として、大学統合準備室(室長 栗野泰次)が開設された。この間約十四年、長い道なのであった。そしてこうしたプロジェクト担当セクションの設立は、ひとつの節目づくりという意味においても絶対条件だといえるものであった。

そしてここで特に付言しておきたいのは、市大統合準備室の果たした役割の大きかったことである。私たちが検討

| | | | |
|----------|--|----------|------------------------------------|
| 1977年4月 | 4大発展を指向しての初等教育科の増設 | 6月 | 両短大の「4大化協議会」発足 |
| 1979年4月 | 学内将来構想検討委員会設置 | | 以後新学部設立準備委員会の発足まで、継続 |
| 1979年 | 名古屋市大学教育懇話会開催 | | |
| 4～5月 | | 11月 | 「名古屋市立新構想大学検討調査-中間報告」(日本開発構想研究所) |
| 1982年9月 | 名古屋市高等教育懇話会開催 | | |
| ～83年3月 | | 1992年6月 | 「大学の将来構想に関する懇談会」(名古屋市、座長飯島宗一)発足 |
| 1984年2月 | 市立三大学将来構想検討委員会 | | |
| ～85年7月 | | 4月 | 「大学の将来構想に関する提言」提出 |
| 1988年6月 | 「本学の将来計画について」=文学部案 | 1993年7月 | 「統合・四年制化準備検討委員会」(総務局主催)・三大学統合計画浮上 |
| 1989年5月 | 生活文化大学案(女子短大)構想 | | |
| 1990年10月 | 「名古屋市における短期大学の将来方向に関する調査報告書」(日本構想開発研究所) | 9月 | 西尾市長、三大学統合を正式に表明 |
| | | 9月 | 自然科学研究センター案(市大教養部)提出 |
| 12月 | 教養部解体案(国際文化、基礎学部)提出 | 11月 | 「名古屋市立大学新構想学部案について」(日本開発構想研究所コメント) |
| 1991年2月 | 「21世紀に向けての名古屋市高等教育充実構想」将来構想第2次試案(保育短大) *生涯教育学部案 | 1993年12月 | *人間社会学部案の検討、2学部案示唆 |
| 1991年4月 | 両短大の統合による4大化について名古屋市は非公式に了解 | 1994年1月 | 2学部4学科案の方向を総務局長が了承 |
| 4月 | 総務局大学設立準備室設置 | 1994年6月 | 芸術工学部、人間社会学部案で4大化協が合意 |
| | | | 「市立三大学の統合に関する整備委員会」発足 |

表1 新学部設立への合意形成過程

対象とした多くの先行事例にあつては、いわゆるトップダウン方式が圧倒的に採用されていた。またそれに起因するいくつかの摩擦についても多くのことを耳にしていた。しかし、本事例にあつては、準備室のスタッフは実に良く教員サイドの意見を尊重して下さった。時には私には教員のわがままではないかと思うほどのことについても、耳を傾け、誠実に対応して下さった。そのために時間はかかったが、内容的には、いわば「名古屋市大方式」として後生記録されるに値するきわめて民主的な方法が創出されたと言つて良い。スタッフのご苦労に感謝の意を込めて、是非記録しておきたいことのひとつである。

第二には、本事例固有の問題点を指摘しておきたい。それは三つもの、それぞれの歴史と個性を持った学校の統合がもたらす難しさであった。そこには①二つの短大がそれぞれ四大へと発展するだけでも、その仕方と内容をどう考えるかという難しさ、②一九九一年段階で、市の意向によつて両短大の統合四大化をしなければならないという難しさ、③一九九三年段階でさらに、市大の教養部改組問題がくつつき、市大の教養部改革と、両短大の統合四大化を実現しなければならぬという困難さ。

この困難さは、具体的にはどのような学部学科を構想す

| No | 日時 | 主たる議題 | No | 日時 | 主たる議題 |
|----|--------|---|----|--------|--|
| 1 | 平成6年6月 | 設立準備体制の構造について 学部・学科・入学定員について 取得資格の検討 | 13 | 6月 | 新学部入学者選抜実施要綱要旨等 報告、確認（市大入試委員会へ 報告） 人文社会学部棟設計内容報告と検 討 |
| 2 | 7月 | キャンパスの所在地について 学部・学科の理念の検討 | | | 図書等整備状況報告 |
| 3 | 8月 | 3年次編入学制度の検討 教養教育の考え方について | 14 | 7月 | 設置構想委員会意見について報告 |
| 4 | 9月 | 入学試験について 学部の教育理念及び教育課程の特 色についてつめの議論 | 15 | 8月 | 人文社会共同研究施設予算要求案 の検討 新学部関連予算要求について説明 |
| 5 | 10月 | カリキュラムについて検討開始 学科制か講座制かについて議論 国際文化学科で留学生、帰国子女 入試 実施方針決定 | 16 | 9月 | 入学試験における健康診断判定基 準の検討 嘱託員要求について検討 (実質は助手問題) 保母養成課程申請をおこなった旨 報告 |
| 6 | 11月 | 教養教育の理念・科目案について 合意成立 平成8年度入試概要決定 | | | 教育方法の特色について追加資料 説明と承認 |
| 7 | 12月 | 「申請書類原案」の検討 教員配置・定数・採用計画の検討 教員選考規定の作成 | | | 市大学長、学生部長および図書館 長選考規定検討状況について報 告 |
| 8 | 平成7年1月 | 「人文社会学部」で申請を決定 自己点検・評価制度について議論 助手問題 | 17 | 10月 | 学部運営諸規定について検討 補正申請書類報告 シラバス・プロフィールの検討開 始 |
| 9 | 2月 | 保母を除く取得資格について検討 非常勤講師、集中講義、外国人教 師、客員教授に関する財政局と の調整開始 | 18 | 11月 | 平成8年度帰国子女・私費留学生 入試内容決定報告 平成8年度学事日程検討 シラバス、原稿依頼へ 両短大の研究室移転方法、内容に ついて確定 |
| 10 | 3月 | 5人の外国人教師要求を決定 教員候補者名簿を承認 学士号に付記する専攻分野決定 教育課程修正報告 教員選考（非常勤講師、外国人講 師）について追加承認 | 19 | 12月 | 10/19の文部省実地審査結果報告 21日、第1回教員予定者懇談会開 催 研究費配分（実験・非実験）及び 執行方法確定 教授会規定の検討と承認 |
| 11 | 4月 | 外国人教師承認報告 研究費区分について検討中との報 告 施設設備について現計画案報告 申請書類最終稿について報告 入学試験時間割、実施要綱等につ いて報告 進学説明会対応策報告 | 20 | 平成8年1月 | 学部運営の基本的な考え方と組織 について検討 専科生、科目等履修生について検 討 平成9年度、センター試験科目等 決定 学部長選考規定検討 履修要項原案確定 動物実験委員会規定検討 在外研究員、国内研究員制度等の 説明と意見交換 入学式及び新入生オリエンテーシ ョンの内容について協議 |
| 12 | 5月 | 教員選考（非常勤講師、外国人教 師）について追加承認 入試実施要綱、選抜実施要綱要旨、 集計員についての報告了承 海外派遣、客員教員招聘制度につ いて議論 個人調書（3月から開始）の最終 構成 スケジュール確認 | | | |

表2 人文社会学部準備委員会の歩み

るのか、教養的教育の哲学をどう合意するのかという問題として、かなり長い間尾を引くこととなった。また、そこにはさらに現有教員の専攻分野の偏りと、教員の定数増を認めないと言えない条件との戦いもあつたのである。

但し、本事例においては教養部所属の自然科学系の先生方がいち早く、市大の内部組織として「自然科学教育センター」を構成し、新学部構想への発言を控えて下さつたという事がある。他大学の教養部改組において、幾度か指摘されたこの部分での摩擦を避けられたことは、まさにありがたいことであつた。

第三は、本事例にあつては一九九一年の統合準備室の発足と同時に、「日本構想開発研究所」（以下「構想研」とする）というシンクタンクを利用したという事をして記しておきたい。彼らはいわばプロの大学つくりやさんであり、構想をまとめる際の方法や考え方、実務処理の具体的な方法等、学ぶところは多かつた。良い使い方（効果的な使いかた）ができる条件があるならば、検討されて良いファクターであつたというのが実感である。

作業過程の 実際

次に、「市立三大学の統合に関する整備委員会」が設置された以降の、具体的なタイムスケジュールとその内容について述べる。

これについては各学部ごとに設置された「設立準備委員会」の議案（但し、私が要約している）をたどることによつてその概要を理解していただけるだろう。（表2参照）

記録さるべき

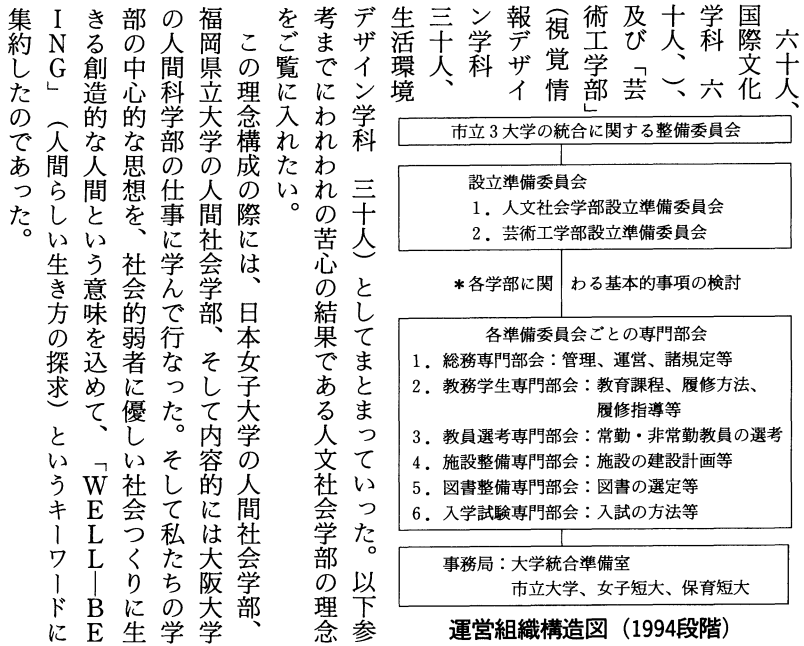
(1) 運営組織の構造

いくつかの論点

本事例の展開にあつて採用された運営組織の構造は図の如くである。この機能を担当し基本的な内容の審議と確定が行われた。本委員会は先の年譜に示したように毎月一回、城戸毅人文社会学部委員長、柳澤忠芸術工学部準備委員長のもとで正確に開催されてきた。みごとに機能した組織構造ではあつた。

(2) 学部名称と学部学科の教育理念

文部省への申請書類の作成過程の中で、最も苦勞したのはいうまでもなくどんな学部をつくるのか、その内容はどのようなのかという基本的な問いへの回答であつた。この作業にあつては①今日及び今後の日本の高等教育を展望して、必要とされるまたは設置さるべき大学とは何かという議論、②参考となるような先行事例を求めること、③具体的に設立可能な学部学科であるか（主としてスタッフの問題）が考慮された。実に様々な意見と討議の中で、最終的には「人文社会学部」（人間科学科 六十人、現代社会学科



(3) 理念からカリキュラムへ

学部学科の名称が決定し、その教育理念についての合意が形成されたならば、後の仕事は極めて実務的なものとなる。いうまでもないが各学部学科にはそれぞれ審査基準があるわけで、その審査基準をふまえて必置すべき学科目とそれをふまえてその大学の個性を表現する展開科目を設定すればよいのである。その際、最近接で設立された類似学部・学科が「物差し学科」として機能するということは案外大切なことであった。

書いてしまえば簡単だが、そこには担当者という生身の人間の意思と、現任者の専攻分野の問題が発生し、学問的な構想とのずれを如何に埋めるかには苦労を強いられたところである。以下、参考までに新学部の教育課程一覧を示し、参考に供したい。

(4) 教養的教育のカリキュラム構成

教養的教育課程をどう構成するかという問題も、かなり時間がかかった厄介な問題であった。そのスタートは私自身が先行して行われた教養教育改革の考え方とその内容を丁寧に進んで、本学にふさわしい教養的教育の具体的な内容を考え出す努力をするところから始まった。その際参考にさせていただいた資料のひとつに「大学改革とは何か」

(一九九三・七、藤原書店編集部)がある。この書物には東京大学、中央大学、東洋大学、駒澤大学の教養教育改革の具体例が載っていて、大変勉強になった。また、それ以外に人文社会学部の教育理念

社会環境と価値観の急激な変動が進行している今日、大学における研究や教育に対する社会的養成にも大きな変化が生じてきた。高度化する産業とそのひずみ、国際化の進展に伴う異文化摩擦など、様々な現代的課題を把握し、人間性豊かな環境づくりをめざそうとすれば、これらの現象の背後に存在する人間・社会・文化の絡み合いを多方面からの確に理解しておくことが不可欠となっている。そのためには単一の専門領域を深めるだけではもはや充分とはいえず、人文・社会諸科学を基礎として学際的に対応することが求められる。すなわち、人間形成と文化、コミュニケーションの諸相、社会の構造と機能などについて幅広い考えを取り入れ、全体的な視野と思考法とを身につけることの必要性がますます高まっているのである。

人文社会学部はこのような要請に応えるため、従来の伝統的な学問領域の枠組みを取り払い、人文・社会諸科学の中の心理・教育、社会、文化の諸分野から構成される三つの学科―人間科学科・現代社会学科・国際文化学科―を設置する。三学科は本学部において相互に連携し、知見をおぎないあいながら、社会に関わる課題を探求し、人間と文化のあり方を問い直すための学際的な教育・研究を行う。

外にも慶應義塾大学の改革例や放送大学の教養教育の事例等にも目を通していた。さらに当時神奈川大学の副理事長でいらつしやつた青木宗也先生には、たまたま御郷里がこちらだということで直接御指導をいただく機会を得たことは、今では貴重な思い出となった。その教えに学びながら神奈川大学案を下敷きにおいて書き上げた本学の教養教育案が日の目を見たことを、一度御霊前にご報告しなければと思つている。

ところで本学での教養教育の考え方についての検討は申請一年前に始まつたと記憶している。その時点において私は教養的教育の内容の構想の起点となるべく、①どのような教養的教育をするのかについての基本的な考え方と、②具体的な内容をどう構想するかについて、当該委員会で報告した。その概要は次のようなものであつた。

専門教育の基礎教育という従来の教養教育観を払拭し、青年期にふさわしい人間の発達のための基礎教育との視点に立ち、「豊かで幅広い教養教育」をめざすものである。いいかえれば大学レベルで行うにふさわしい人間教育の今日的な内容が問われているとの課題意識にたち、アランブルームの指摘に学び、青年の人間的可能性の発現に資する教養教育への実践的取り組みを行うものである。本学部の教養的教育はこの問題意識に他つて、具体的には以下の教育課題

人間科学科専門教育カリキュラム

| 授業科目 | | 授業科目 | |
|------|--|------------------|---|
| 基礎科目 | 人間論 社会学概論 現代社会問題 比較文化論 国際関係論 生涯健康科学論 | 社会と人間関係系 展開科目 | 人間科学演習Ⅲ (1)社会と人間関係 (2)家族と福祉 人間倫理論 人間倫理論 コミュニケーション論 現代日本語論 社会哲学 価値規範論 家族コミュニケーション 家族社会学 現代子ども論 社会福祉論 児童福祉論 児童文化論 高齢者福祉論 障害者教育論 社会調査法 |
| | 発達心理学 実験心理学 教育学概論 現代教育論 社会意識論 社会集団論 | | 原典講読(外書講読) 人間科学特別講義Ⅰ 人間科学特別講義Ⅱ 社会学史 地域社会学 地域福祉論 行政法 民法 社会福祉演習 保育原理 養護原理 小児保健 小児保健実習 小児栄養実習 精神保健 保育内容演習(健康) 保育内容演習(人間関係) 保育内容演習(環境) 保育内容演習(言葉) 保育内容演習(音楽的表現) 保育内容演習(造形的表現) 基礎技能(音楽) 基本技能(体育) 基礎技能(図面工作) 保育実習Ⅰ 保育原理Ⅱ 養護原理Ⅱ 保育内容演習Ⅱ(健康) 保育内容演習Ⅱ(言葉) 保育内容演習Ⅱ(表現) 乳児保育Ⅰ 乳児保育Ⅱ 基礎技能Ⅱ(体育) 基礎技能Ⅱ(音楽) 保育実習Ⅱ 保育実習Ⅲ |
| 基幹科目 | 人間科学演習Ⅰ (1)発達と行動 (2)健康科学 心理検査法(演習) 心理学実験(基礎) 心理学実験(特殊) 教育心理学 心理統計法(演習) 臨床心理学 学習心理学 知覚心理学 神経心理学 人格心理学 青年心理学 家族心理学 社会精神医学 社会心理学 健康心理学 動作学 健康管理学Ⅰ(母子健康論) 健康管理学Ⅱ (1)栄養学 健康管理学Ⅱ (2)栄養学実験 健康管理学Ⅲ (1)食品学 健康管理学Ⅲ (2)食品学実験 健康管理学Ⅲ (3)食品加工実習 健康管理学Ⅳ(公衆衛生学) | 関連科目 | 人間科学演習Ⅱ (1)社会と教育 (2)学習と形成 教育史 教育制度論 教育社会学 生涯学習論 社会教育学 比較教育学 教育内容論 教育方法論 身体発達論 レクリエーション論 幼児教育論 教育福祉論 |
| | 心身相関係 | | 卒論等 |
| 展開科目 | 人間科学演習Ⅰ (1)発達と行動 (2)健康科学 心理検査法(演習) 心理学実験(基礎) 心理学実験(特殊) 教育心理学 心理統計法(演習) 臨床心理学 学習心理学 知覚心理学 神経心理学 人格心理学 青年心理学 家族心理学 社会精神医学 社会心理学 健康心理学 動作学 健康管理学Ⅰ(母子健康論) 健康管理学Ⅱ (1)栄養学 健康管理学Ⅱ (2)栄養学実験 健康管理学Ⅲ (1)食品学 健康管理学Ⅲ (2)食品学実験 健康管理学Ⅲ (3)食品加工実習 健康管理学Ⅳ(公衆衛生学) | 関連科目 | 人間科学演習Ⅱ (1)社会と教育 (2)学習と形成 教育史 教育制度論 教育社会学 生涯学習論 社会教育学 比較教育学 教育内容論 教育方法論 身体発達論 レクリエーション論 幼児教育論 教育福祉論 |
| | 学習と形成系 | | 卒論等 |

期待される卒業後の進路

●心理・行政系の公務員分野、教育・福祉関連分野、一般企業(子ども・健康関連産業)など、保母資格の取得も可能(申請中)です。

に対応する学科学科目群によって構成される。

①現代社会の理解・社会や学問の世界への問題関心を広げ、批判的に問題を追究する態度の基礎を育成する。

②異文化・自文化との出会い…

・日本を起点とした文化の発信と受信の基本構造とその広がり
の理解

・名古屋に関する文化及び、姉妹都市についての学習機会の提供

③人間の探求…

・人間存在についての多様な観点からの接近と理解
・人間の豊かさについての学習(主として文化論)
・人間の表現及び表現活動に関する総合的な学習

④自然と科学技術・科学的な真理追究の方法についての学習

これは一言でいえばアカデミックスキルの適切な配置と、豊かな人間性の獲得を意図したものであったといつてよい。
そして、この時同時に提案された「採用される教育方法」の特徴

現代社会学科専門教育カリキュラム

| 授業科目 | | 授業科目 | |
|------|---|-------|---|
| 基礎科目 | 人間論 社会学概論 現代社会問題 比較文化論 国際関係論 生涯健康科学論 | 都市と地域 | 地域社会学 都市社会学 地方財政論 政治社会学 現代人権論 地域政策論 公共政策論 地域空間構成論 地域福祉論 |
| | 現代産業・労働問題 現代都市問題 現代環境問題 現代家族問題 問題認識特講Ⅰ 問題認識特講Ⅱ | | 展開科目 |
| 基幹科目 | 現代社会学 社会意識論 社会集団論 社会構造・変動論 社会階層論 社会学史 社会情報統計論 社会調査法 | 生活と文化 | |
| | 社会思想史 法社会学 日本社会史 社会経済史 文化人類学 民俗学 経済学 経営学 | | 関連科目 |
| 展開科目 | 労働社会学 企業と会計 マーケティング 流通と消費者 オペレーションズ リサーチⅠ オペレーションズ リサーチⅡ 情報処理特論 マス・コミュニ ケーション論Ⅰ マス・コミュニ ケーション論Ⅱ 情報社会論Ⅰ 情報社会論Ⅱ | 産業と情報 | |
| | | | 卒論 |

期待される卒業後の進路

- 一般企業、金融関係、総合商社、サービ
ス観光事業、公共企業体、地方公共団体、
マスコミ、出版、広告関係など。

国際文化学科専門カリキュラム

| 授業科目 | | 授業科目 | |
|------|---|------|--|
| 言語科目 | 英語セミナーⅠ 英語セミナーⅡ 英語による専門討論 ドイツ文化論講読Ⅰ ドイツ文化論講読Ⅱ ドイツ語初級会話 ドイツ語中級会話 フランス文化論講読Ⅰ フランス文化論講読Ⅱ フランス語初級会話 フランス語中級会話 | 基礎科目 | アメリカの文学 アメリカの歴史 アメリカの思想 アメリカの社会 アメリカ文化特講Ⅰ (小説の世界) アメリカ文化特講Ⅱ (現代アメリカ思想) ヨーロッパの文学Ⅰ (イギリス) ヨーロッパの文学Ⅱ (ドイツ) ヨーロッパの文学Ⅲ (フランス) ヨーロッパの歴史Ⅰ (イギリス) ヨーロッパの歴史Ⅱ (ドイツ) ヨーロッパの歴史Ⅲ (フランス) ヨーロッパの思想Ⅰ (イギリス) ヨーロッパの思想Ⅱ (ドイツ) ヨーロッパの思想Ⅲ (フランス) ヨーロッパの社会 ヨーロッパ文化特講Ⅰ (イギリス世界) ヨーロッパ文化特講Ⅱ (オーストリア文化) ヨーロッパ文化特講Ⅲ (ハンガリー文化) |
| | 社会学概論 現代社会問題 人間論 生涯健康科学論 比較文化論 国際関係論 コミュニケーション論 英米事情 ドイツ事情 フランス事情 レトリカル・コミュニ ケーション論 言語学 | | 展開科目 |
| 基礎科目 | 社会学概論 現代社会問題 人間論 生涯健康科学論 比較文化論 国際関係論 コミュニケーション論 英米事情 ドイツ事情 フランス事情 レトリカル・コミュニ ケーション論 言語学 | 基幹科目 | |
| | 異文化コミュニケー ション論 文化人類学 日本文化概論 英米文学概論 異文化間心理学 比較宗教論 | | 展開科目 |
| 基礎科目 | 異文化コミュニケー ション論 文化人類学 日本文化概論 英米文学概論 異文化間心理学 比較宗教論 | 展開科目 | |
| | 国際日本文化論系 | | 卒論 |

期待される卒業後の進路

- ジャーナリズム、出版、文化産業部門、
一般企業の国際部門、語学を主とするサ
ービス部門など。

として以下の点を指摘していた。

①各学科単位での、四年間を通じて個別的な履修方法の採用

②各分野の特性に応じたかたちでの体験的学習^{II}体で学ぶ教育の

重視

③全学部の保有する知的財産の積極的、効果的活用

④選択履修の範囲をできるだけ拡大することによる、学生の「選

んで学ぶ」行動の尊重

⑤専門教育との有機的な連関を可能とする開放教育科目の設定

(一九九四・八 教務学生専門部会報告案(丹羽案))

幸いにこの文書で表現した教養的教育の基本的な考え方は関係者の合意を得るところとなり、現実的な修正はその後の過程で加えられはしたものの、こうした、哲学を持つた教養的教育への一步を踏み出すことができたのは、大きな収穫だった。左表は参考までに本学教養的教育の最終案である。

□ 今後の課題

シラバスづくりと

授業評価問題

既に紙数はつきた。まだまだ書き残してお伝えしておきたいことは山ほどある。しかし、今はその課題の中でも最大のもの、というかこれから本格的に当面しなければ

ばならない課題ということで書いておきたいことのひとつは、教育方法の特色の問題である。これはこの近年いろいろなところから耳に入ってきている授業のシラバスづくりとか、学生による授業評価といった事柄に関わっている内容である。近年文部省は各大学においてその独自性発揮のための具体的な方策への要求を強めてきているが、本事例においても補足資料として、「本学部における教育方法の特色」なる文書を要求され、それなりに執筆した。

具体的には、一つは学生の教育指導の質的向上のためにどのような努力目標を持っているかという事であり、二つには学部としての独自の存在意義をどのように作り出そうと考えているかについての回答の要求であると考えられる。本学においても、とりあえず学生への教育サービスの質的向上のためにということで、開設学科目のシラバス集つくと、教員のプロフィールの記述を行った。いろいろな苦情や意見が噴出する大変な作業であった。この教育サービスの質的向上に関わるもう一つの課題としての教員の教授能力の向上という問題はさらにやっかいである。教育学の世界においては自分の実践を総括し「わかりやすい、質高い授業の追究」などは自明の課題なのだが、大学教員の世界はこの点では全く時代遅れといって良い。とりあえずは

人文社会学部
 教養教育カリキュラム(3学科共通)

| 授業科目 | | 授業科目 | |
|-------------|---|-----------------|--|
| 現代社会の諸相 | 現代社会の構造 国家・人間・法 (日本国憲法を含む) 現代日本経済論 市民社会の思想 市民と政治 | 自然の認識 自然のしくみ | 宇宙の構造と進化 ミクロの世界の物理学 物理学入門 物質の世界 分子の形と機能 バイオサイエンス入門 生命のしくみ 発生の生物学 |
| | 環境と情報 環境経済論 公害と環境問題 情報社会とマスコミ | スポーツと健康 | 健康・スポーツ科学論 健康スポーツⅠ 健康スポーツⅡ |
| 異文化・自文化との違い | 文化人類学入門 西洋の人間観 西洋文化の受容 ヨーロッパ史入門 アメリカ史入門 東アジア史入門 人文地理学 | 英語 | コミュニケーション英語Ⅰ コミュニケーション英語Ⅱ 英語リフレッシュⅠ 英語リフレッシュⅡ 総合英語Ⅰ 総合英語Ⅱ 総合英語Ⅲ 総合英語Ⅳ 応用英語 英語討論Ⅰ 英語討論Ⅱ |
| | 自文化の理解 日本の文学 日本宗教史 日本語学 国語表現法 東海の歴史と文化 | | 外国語 未修外国語 |
| 人間性の探求 | 心と行動 心理学入門 人間の心理と行動 人間形成と自然認識 哲学の基礎 | 日本語 | 日本語初級Ⅰ 日本語初級Ⅱ 日本語中級Ⅰ 日本語中級Ⅱ |
| | 倫理と生命 生命倫理学 環境倫理学 | | 情報と数理 情報数学基礎 確率と統計 情報処理基礎 情報処理応用 |
| 自然の認識 | 芸術と表現 美術の歴史と鑑賞 音楽の歴史と鑑賞 人間とデザイン | 人間と自然 | 科学技術史 自然と環境問題 生活の中の化学 食生活と健康 生活の中の衣料 人間と居住 |
| | 人間と自然 | | |

学科により履修形態が異なる場合があります。

いというのが私の見解である。その事を機会あるごとに力説してきたのだが、いくつかの壁に出会った。それはひとつは人間の壁であり、ひとつは行政の、いや財政の壁であり、いまひとつは人間科学科に即していえば文部行政と厚生行政の厚い壁であった。

「いい大学を作るために具体的にできることは何かについて合意の形成をはかっていきましょう」というレベルの合意で事は始まる、というのが実態である。しかし、先生方がわかりやすい質高い授業づくりの必要性の認識を共有するとき、我が新制学部は、このステージにおいてさらに意味ある存在価値を輝かせてくれるに違いないと信じている。

資格取得問題

具体的の問題となった事の二つ目は、新学部においてどのような資格取得の可能性を残すかという事である。今更いまでもないことだと思ふのだが、大衆化時代の大学にあって、職能資格を取得できるということは大切な進学動機のひとつに違いな

あつてさえ、発足時には幼稚園教員免許取得の道を断念せざるを得なくなつた。また教員免許取得のための課程認定の申請手続きの複雑さは、新学部設置で身も心も頭も疲れはてた担当事務局を後込みさせるほどのものなのである。

しかし、こと幼稚園教員養成に限っていえば、日本福祉大学、愛知県立大学と相次いで戦線縮小のおり、いわば「保育短大、おまえもか」というわけである。当該地方の教員養成制度のあり方全般を見通しての対応が、急務とされるるところである。